



1)北アメリカにおける東アジア研究のメッカ
ハーヴァード=イェンチング研究所

United States of America



アメリカ合衆国南西部遺跡訪問 ——佐々木憲一

アメリカ合衆国はとにかく広い国である。日本だと、車を使えば1日に6箇所くらいの遺跡を見学できる。合衆国では、遺跡が比較的密集している南西部、現在のアリゾナ州、ニュー・メキシコ州でも、ひとつの遺跡から次の遺跡に移動するのに車で3時間以上、途中対向車に出会うのが30分に1台というような田舎道を時速80キロ以上で走り続ける。だから1日に見学できる遺跡の数も限られてくる。

2009年4月から2010年7月まで16ヶ月間在外研究をいただき、母校のハーヴァード大学ライシャワー日本研究所客員研究員としてアメリカ合衆国に滞在した。そもそも高校、大学、大学院をアメリカ合衆国で修了した私がなぜまた同じ国に？と疑問に思われるかもしれない。学生時代は貧乏でアメリカ合衆国の国内遺跡見学旅行などできる金銭的余裕が全然なかったのである。



Ken'ichi Sasaki profile

文学部教授(専門は古墳時代論・国家形成論)

- 1962年 東京生まれ、京都市育ち
- 1995年 ハーヴァード大学人類学研究所大学院博士課程修了(学術博士)
- 1997～1999年 国際日本文化研究センター講師
- 1999年 明治大学文学部専任講師
- 2009年 現職

【主な著書】

『はじめて学ぶ考古学』(共著、有斐閣、2011)、『常陸の古墳群』(共編著、六一書房、2010)、『信濃大室積石塚古墳群の研究III』(共編著、明治大学文学部考古学研究室・六一書房、2008)、『関東の後期古墳群』(編著、六一書房、2007)

【所属学会など】

日本考古学協会、Society for American Archaeology、駿台史学会、日本考古学会、考古学研究会

地域では、トウモロコシ栽培に依存した定住・農耕社会が紀元900年までに成立した。遺跡というと地下に埋もれているケースが多数であるが、この地域では地表に突出して残された遺跡が極めて多い。特に、レンガ造りの複数階の建造物が顕著な特徴である(2)。発掘せずに遺跡が認識できるから、考古学研究も19世紀後半から非常に盛んで、南西部はアメリカ合衆国における考古学のメッカである。そのセンターのひとつであるアリ

ゾナ大学人類学部(学科ではなく、学部 school)は48名の専任教授・准教授・助教授を擁し(その他多数の兼任教員)、そのうち22名が考古学者である。今回は、訪れた数多くの遺跡の中で、ニュー・メキシコ州北西隅に所在する、世界遺産チャコ・キヤニオン遺跡群(チャコ文化国立史跡公園Chaco Culture National Historic Park)を紹介する(3)。まず、国立公園へのアクセス道路を意図的に未舗装にするという文



3)チャコ・キャニオン遺跡群のプエブロ・ボニトPueblo Bonito遺跡、前景の円形部分がキヴァ



4)チャコ・キャニオン遺跡群内の住居跡、祭祀遺跡と違いレンガ積みが雑

化財への配慮に感動した。遺跡群は三時期、プエブロ Pueblo I、紀元750～920、プエブロII、920～1020、クラシック・ボニト Classic Bonito、1020～1120に分けられ、1200年までに住民は他地域へ移住した。当時はプエブロ文化の祭祀センター、交易の拠点であり、チャコから各地に道路が延びていた(すべの道はチャコに通ず)。現在、この遺跡群を建造したプエブロ族の子孫は遺跡群内で生活はしていないものの、彼らにとって、聖地、祭祀センターとして、現在でも機能している。

キャニオンという名が示すとおり、遺跡は自然渓谷内に立地する。北側は祭祀遺跡(3)、南側は居住遺跡(4)に分かれている。遺跡の構造は「グレート・ハウス」と呼ばれる独特なもので、特徴的な煉瓦積みをもつ複数階の公共施設とキヴァ Kivas (南西部特有の祭祀施設、円形が多いが方形もある、現在でも先住民の社会で機能している)から成り立つ。

南西部では、こういった文字の



5)タオス・プエブロ、チャコ遺跡群に残る建造物とまったく同じ構造の集合住宅



2)プエブロ・ボニト遺跡内、2階と3階の床を支持する木製梁が壁面から多数突出しているのがわかる。つまりこの建物は最低でも3階建て

ない時代の遺跡を残した先住民たちの子孫が現在でも付近で生活している。プエブロ族の一部は現在、遺跡から東へ車で3時間のニュー・メキシコ州タオス Taos で、当時とまったく同じ構造の建物で生活している(5)のには驚いた。日本人考古者にとっては、合衆国において考古学専攻が史学科ではなく人類学科におかれている現実には理解困難である。しかし、こういった現状を目の当たりにしたとき、合衆国において考古学が民族学と一体となって研究されてきたのもごく自然の成り行きだな、と痛感した次第である。